

旭川医科大学 回顧資料 (14) 昭和 61 年度

医学部附属病院開院 10 周年 式典と記念誌

昭和 61 (1986) 年といえば、4 月 1 日に「男女雇用機会均等法」が施行され、労働現場における男女平等の実現に向けて大きく動き出した年であった。同法施行の勢いにもあずかってか、9 月 6 日には、日本社会党の委員長選挙において、土井たか子候補が当選し、日本の国政史上初の女性党首が誕生した。同党首が発した「やるっきゃない」はこの年の流行語となった。

経済・財政関係の出来事としては、3 月 22 日に日経平均株価が 15013 円と史上初の 1 万 5 千円台に乗ったこと、7 月 7 日、東京外為市場で円が急騰し、終値で 159 円 25 銭となり史上初の 1 ドル 150 円台となったこと、12 月 23 日に自民党税制調査会が「税制改革の基本方針」を決定し、所得・法人・住民税減税の一方で、マル優など非課税貯蓄制度の廃止や売上税導入などが謳われたことが特筆される。ちなみに売上税は、のちに消費税へと衣替えして、3 年後の平成元 (1989) 年 4 月に税率 3 % でスタートした。

災害関係で大書すべきは、11 月 15 日に伊豆大島の三原山がじつに 209 年ぶりに大噴火し、21 日に全島民・観光客に対し島外への避難命令が出されたこと、12 月 28 日に国鉄 (当時) 山陰線の余部鉄橋で回送中の列車 7 両が突風にあおられて転落し、工場を直撃して 6 人が死亡したことであろう。

芸能人関係の大きな話題としては、4 月 8 日、アイドル歌手の岡田有希子 (当時 18 歳) が東京都新宿区の所属プロダクションのビル屋上から飛び降り自殺したことが挙げられる。この報道の後、各地で少年少女の自殺が相次ぎ、2 週間で 29 人が自殺したという。また、12 月 9 日には、コメディアンのとけし (当時 38 歳) が「たけし軍団」11 人とともに講談社の写真週刊誌「フライデー」編集部に押し掛けて乱暴、5 人にけがをさせ、警察に逮捕された。とけしは「愛人問題に絡む取材に抗議するため同編集部を訪れたが、対応が横柄だったので暴れた」、と自供した。以後、各放送局は相次いで彼の出演番組の放送を休止した。

海外に目を転じると、最も注目されるのは、4 月 26 日にソビエト連邦 (当時) のチェルノブイリ原子力発電所で大規模な事故が発生したことである。翌 27 日には北欧諸国で強い放射能を大気中から検出した。

さて、この年の我が旭川医科大学の出来事をみてみよう。4 月 22 日に医学部附属病院に病理部が設置された。11 月には、体育館の部品庫の新営工事 89m²が竣工した。しかし、何ととっても特筆すべきは、この年、医学部附属病院が開院 10 周年を迎えたことである。記念式典は 9 月 6 日に挙行された。当時の雰囲気コンパクトに伝える資料として、B 4 判約 100 ページから成る『旭川医科大学附属病院十年誌』(同記念誌編集委員会編纂、谷川印刷株式会社印刷、同記念行事实行委員会 9 月 6 日発行)がある。式典の当日、列席者に配布されたものと思われる。同誌の「あとがき」の末尾には、編集委員として竹光義治整形外科学講座教授 (当時) のお名前が記されているが、他の編集委員会メンバーや実行委員会メンバーについては記載が見当たらず、詳細は不明である。同誌は鮫島夏樹病院長 (当時) の「開院 10 周年を迎えて」と題する文章に始まり、黒田一秀学長 (当時) の「開院 10 周年に寄せて」、カラーグラビア、病院組織図、病院配置図、各診療科等の沿革、職員録、年表等が続いている。今回は、この資料の中から、「序」の部分 (執筆者不明) と当時の「院内配置図」を転載する。

(旭川医科大学 歴史・哲学)

序

旭川医科大学医学部附属病院は、昭和 51 年 5 月 10 日に設置され、本年 9 月 6 日に開院 10 周年の記念すべき日を迎えることとなった。

本院の蓋世を回顧すると、昭和 36 年から国民皆保険制度が確立されることとなり、これに伴い、医療需要の急速な増加と地域医療水準の向上に資するための無医大県解消計画により、その先陣としての役割を担って昭和 48 年 9 月 29 日に設置された旭川医科大学（医学部）の発足とともに、年次計画により、附属病院開院の胎動が始まった。

昭和 49 年 3 月 27 日の残雪未だ醒めやらぬ日に建物建設を着工し、槌の音が大雪山連峰にこだました。

本院は、各診療科、外来診療棟、中央診療棟、病棟、高エネルギー施設、特殊診療棟などが 6 年がかりで建築され、現在、建面積 8,748㎡、延面積として 44,477㎡の鉄筋コンクリート造り（地上 11 階、地下 1 階）の偉容を市内西神楽の高台に誇るところとなった。顧り見ると昭和 51 年 9 月 22 日に 83.3%に相当する延面積 37,037㎡が竣工し、その概要が膾炙されることとなった。

なお、引き続き 51 年度から 57 年度にかけて 7,440㎡の増築をみたところである。

また、看護婦宿舎にあっては、現在、建面積 1,640㎡、延面積にして 6,015㎡の鉄筋コンクリート造り（地上 5 階 - 190 個室）が完成されているところであるが、51 年度には延面積にして 4,248㎡で現在の 70.6%が竣工し、その後 52 年度および 55 年度において 1,767㎡が増築されたところである。

診療科は、開院時 15 診療科で発足し、昭和 52 年 4 月 18 日に 2 診療科が増設され、当初における年次計画は、予定どおり実現をみるところとなった。また、中央診療施設等は開院時に検査部、手術部、放射線部および材料部の 4 部が置かれ、61 年 4 月 22 日に、これまで内部組織として運営されていた病理部が文部省訓令により定める特殊診療施設の部として設置され、現在の 5 部体制に発展するところとなった。

一方、薬剤部および看護部にあっても、開院時に設置されたところである。

また、本院の目的とする総合的な診療、医療の臨床

教育および研究に資するための所要の組織および運営については、開院時に施行された「旭川医科大学医学部附属病院規程」の規定するところによりなされているところであるが、就中、病院長は医療担当の副学長をもって充てられ、院務を総括している。また、本院の円滑な運営を図るために、病院長、診療科長、中央診療施設等の部長、薬剤部長、看護部長および事務局の総務部長、業務部長をもって構成する運営委員会を設置し、さらには、各種の委員会を縦横に組織しているところである。

現在、病院における定員は、572 人であり、診療関係部門は 481 人、事務部門は 91 人である。前者は、教育職が 93 人、技術・技能等の行政職が 30 人、薬剤師・看護婦等の医療職が 358 人となっている。

しかし、開院に必要な人員年次計画は、昭和 48 年の第一次石油ショックの物価狂乱時代を迎え、翌年には、戦後初の経済成長マイナスとなるなど、これらの財政的余波を受け、当初計画では病院総人員は 644 人とされていたが、計画の見直しにより、580 人に、さらには 575 人という 2 度の修正減を受けたものである。

したがって、その差は、当初比 69 人の減となった。この内訳は、看護部その他の医療関係部門で 51 人、事務部門で 18 人ということとなり、厳しい人員構成とならざるを得なくなった。

なお、事務部門の減は、学年進行中の 51 年 4 月 1 日に事務局と病院事務部の一元化という総務部（庶務課・会計課）、業務部（施設課・医事課）、教務部（学生課・図書課）の 3 部 6 課体制の改革が導入されたことによるものである。

一方、事務局は、その後の定員削減計画の進行に際し、今日までに 30 人の縮減がなされ、行革による波瀾の厳しさを受け、業務の見直し、工夫、改善等の合理化を講じつつも艱の重みに喘いでいるのが現状である。

病床は、当初計画の予算病床数 600 床で現在は、実在病床数として 602 床がある。厚生省認可の経緯から見ると、51 年 10 月 30 日に 327 床で当該年度の 10 床を加えると 56%に相当し、次いで、52 年度 104 床、

53年度 161床の増床が認められるところとなった。

なお、学生の入学定員規模からすれば、当初の100人（昭和54年度からは120人に増募改訂）に対し800床以上というのが、50年7月7日の大学設置審議会からの建議されたところの規模となるが、当該建議において、医学部には、附属病院のほかに学生の臨床教育に当る関連教育病院を置くことができるとされている。更には、附属病院として病床数600床を超える部分については、関連教育病院の教育に使用される病床数をもって充てることができるとされている。この措置は、地域医療水準の向上という命題に対して、臨床医学の急速な発展、専門分化に伴うより充実した臨床医学教育を行うために大学と連携協力して卒前、卒業後における臨床教育にあたる病院を設け、その教育効果を得ることが一つの考えとして映ずるところであ

る。

したがって、新設医科大学としての本院もこの制度の適用を受けることとなった。

ともあれ、苦節10年と云われるが、開院初日の外来患者が71名であったことを想起すれば、今日における本院の現状との対比において、病院創設の労苦は並々ならぬものがあったと今昔の感慨一入のものがあるとともに、初代学長山田守英氏をはじめ、学の内外、院の内外の関係各位および地域社会の多くの人々に支えられ、ご支援、ご尽力を賜ったご恩に報いるため、さらに新しい10年、そして21世紀の医療を担う旭川医科大学附属病院としての責務を自覚するとともに、将来構想の具現を誓い、開院10周年記念誌の序とさせていただきます次第である。

院内配置図

		11 F E V		
東 ナ ー ス ス テ ー シ ョ ン	放射線科、脳神経外科 精神科 神経科	10 F E V	精神科 神経科	西 ナ ー ス ス テ ー シ ョ ン
	第一外科、歯科口腔外科	9 F E V	第二外科	
	第一内科	8 F E V	第二内科	
	第三内科	7 F E V	皮膚科、泌尿器科	
	耳鼻咽喉科、眼科	6 F E V	整形外科	
	麻酔科、共通（小児外科）	5 F E V	小児科	
	分娩室、新生児室 未熟児室	4 F E V	産科 婦人科	
(外来) 第一外科、第二外科、泌尿器科、産科 婦人科、麻酔科、歯科口腔外科 検査部、栄養相談	3 F 材 料 部 集 中 治 療 室 E V	手術部		
(外来) 第一内科、第二内科、第三内科 小児科、整形外科、一般血液検査室 放射線部（エックス線診断部門） 輸血室、郵便局	2 F 理 学 療 法 室 工 透 析 室 中 央 診 療 記 録 室 玄 関 一 階 E V	薬渡し口、初診受付、再診受付 入退院受付、料金計算窓口 料金支払窓口、薬剤部、看護部 事務室、医事相談		
(外来) 精神科神経科、皮膚科、眼科 耳鼻咽喉科、放射線科、脳神経外科 放射線部（核医学部門）	1 F 救 災 急 患 室 防 災 セ ン タ ー 時 間 外 玄 関 E V	病理部、薬剤部、売店 一般食堂、職員食堂 理・美容室、喫茶室		
機 械 室	B 1 F 基 準 寢 具 室 洗 濯 室、消 毒 室 E V	厨 房		